

生きることの意味 : 親鸞聖人の生き方

著者	武井 弥弘
雑誌名	真実心
号	37
ページ	65-104
発行年	2016-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000773/

生きることの意味

——親鸞聖人の生き方——

武井 弥弘

みなさん、こんにちは。…元気ないですね。こんにちは。全く元気がないですね。さぞお疲れのことと思います。

今ほどご紹介いただきました武井と申します。日頃は東本願寺の中で勤めております。親鸞聖人の教えを中心に教育をしている東本願寺の関係学校が北海道から九州まで三十八校ありますので、その関係学校の仕事もさせていただいております。今日はお手元にレジメを配らせていただいていますけれども、親鸞聖人の生き方をベースに生きるこの意味を考えたいと思っております。

まず、「私たちに宗教は必要か？」ということで問いを起こしてみました。この中で

「私は宗教は必要だ」と思う方は手を挙げてみてください。人間にとって宗教は必要だと思う方。「必要ない」と思われる方は手を挙げてみてください。手を挙げない方は手を挙げてみてください。それは分からないということですか？

実は去年から東本願寺奨学金を作りまして、こちらの光華女子大学にも奨学金をもらっていた方がいると思いますが、その奨学金を頂いてもらう時にレポートがありまして。いくつかテーマを選べるんですけども、「宗教は必要か？」という題名で書いていただいています。全国いろんな所からそのレポートを出して頂いて、見てみると半分ぐらいの人は「宗教は必要だ」とおっしゃいます。しかし三分の一ぐらい、もうちょっと少ないですかね、「宗教は必要ない」とはつきり書いている方もおられます。何で宗教は必要ないか。「今は必要性を全く感じない」ということです。それよりも自分自身で一生懸命頑張ればいいんだと書いてこられた方もおられます。人間が生きていく上で宗教は必要なんじゃないか、何か頼るものが必要なんじゃないかと思っておられる方は多いですが、そう書かないと奨学金をもらえないんじゃないかと思っただ人もいるかもしれません。「宗教は必要か？」まずこの問いから考えてみたいと思います。

お手元のレジメに「誤った宗教理解」と書きました。「宗教とは何だ」と問うた時に、

生きることの意味

「お年寄りが信じるもの」と思っている方が多いということです。二番目に「死んでから先のことを扱っているもの」。仏教は葬式・法事をやりますから、死んでからのことを扱っているのが宗教だと思っておられる方も多いです。三番目に「宗教は弱い人のもの」。ハンディキャップがあつたり、病気になるったり、いろんな難題・課題を抱えている人が信じるもの、そのためにはあると思っておられる方も多いいんじゃないでしょうか。しかし、これは誤りであります。特に正しい真実の教え、親鸞聖人の教えを頂くものにとつては、この三つの考え方、宗教は歳を取ってから考えればいいんだ、死んでから先のことだ、弱い人のためにあるんだ、というのは全くの間違いであるということになります。

私は、出身の鳥根県浜田市という田舎でちっちゃな寺の住職をしております。ちよこちよこ寺に帰っておまいりをしているんですけれども、門徒さんたちに「どうぞ、お寺におまいりに来てください」と誘いますと、「いやいや住職さん、わしがお寺に行くのはまだ早い」と言われます。働くのがだんだんしんどくなつて、身体も動かなくなつて、死が近づいてきてから、お寺に行つて仏様に頼もうか、と。こういう門徒さんが本当に多いんです。しかし、繰り返すようですが、親鸞聖人はそういうことは一切おっしゃっておりません。むしろ逆です。年寄りのものでもなければ、死んでから先のものでもない、弱い人の

ものでもない。本来の宗教は、年寄りとか若いとかを抜きにして、若い人こそちゃんと学ばなくてはいけない。今、生きている人のために説かれているのが宗教である。ハンディキャップがあつたり、弱い人のためのものでもない。むしろ健康でバリバリ働いている、一生懸命生きている人にこそ必要であるとおっしゃっています。仏教、特に真宗の教えは、人間に生まれたからにはちゃんと出会わないといけないもの、生きていることを問題にしているもの。だから、聞かなくてはいけないもの、考えてみなくてはいけないものだと説かれています。

宗教の「宗」という字は、そこに「むね」と書きましたが、漢字がなかった時は、「むね」は全部大事なものの、中心を意味していました。それをちに漢字に当てはめて「宗・胸・旨・棟」、つまり、大事なものの。中心的なものということ。従って、宗教は人間にとって本当に大切なもの、生きていく上で考えなくてはならないもの、と位置づけることができると思います。繰り返しますが、決して、年寄りのもの、死んでから先のもの、弱い人のためにあるものではありません。

そこに「チンパンジーとの違い」と書きました。ちょっと古いデータで申し訳ないですが、けれども、四年くらい前の九月十四日だったと思います。朝日新聞に小さなコラム記事が

生きることの意味

出ました。タイトルは『もうチンパンジーの能力に驚く時代は終わった』。何かというと、人間の遺伝子と、人間に一番近い霊長類であるチンパンジーの遺伝子を比べてみると、違いはわずかに一・二％であるということが分かったんです。日本で霊長類の研究が一番進んでいる京都大学の先生がいろんな本に書いておられます。一・二％しか遺伝子コードが違わないということは、九八・八％は一緒だということです。人間がやることをチンパンジーがやってもおかしくないわけです。みなさんは『猿の惑星』という映画を観られたことはないですか。飛行船が故障して、ある星に不時着する。そこはお猿さんが牛耳っている世界で、人間が奴隷として使われているという話です。もし関心のある方は是非観られたら良いと思います。続編もありますけど一作目が一番面白いです。最後にどんでん返しがありません。人間の危なさをえぐり出している映画ですが、そういう人間とチンパンジーの遺伝子が九八・八％一緒だということは驚くべきことです。

京都大学の霊長類研究所は愛知県にありますけれども、何年前そこにアイちゃんというチンパンジーがいました、字も書ける、ひらがなも読める、「1+1=2」算数もできる、色も見分ける、天才チンパンジーだと言われました。今はその息子のアユムくんがいて、なかなか出来がいいそうですが、実験していきますと人間よりはるかに高い能力もあ

るわけです。自然の中で生きるとは人間よりもチンパンジーの方がはるかに優れています。一瞬で見分ける、危ないと思っただけですぐ逃げる。チンパンジーがあらゆることをやって当たり前ということが、そのコラム記事の見出しの意味でした。

ジェーン・グドールというイギリスの女性学者が、タンザニアで二十年間ぐらいつつとジャングルに入って自然のチンパンジーの生態を観察・研究をされたそうで、その研究で、チンパンジーは野生でも道具を使う。実を割る、肉を食べる：いろんなことが分かってきたんです。その方が、京都大学が開いた世界霊長類研究学会に招待されて日本にいられた時に朝日新聞の記者がインタビューしたコラム記事でした。新聞記者が「そこまで遺伝子が一緒に能力が一緒なら、人間とチンパンジーの違いは何ですか」と訪ねると、ジェーンさんは「チンパンジーは、今・ここ」を一生懸命生きています。人間には過去と未来があります。これが決定的な違いです」と、ただちに応えています。チンパンジーは、「今・ここ」を一生懸命生きて、群社会を作って、子孫を残していく。チンパンジーには過去と未来がないということです。今を一生懸命生きるんです。人間はそうではありません。「しまった、ああいうことをしなければ良かった」「何でこんなことになったんやろ」「あれ、楽しかったなあ」過去を持ちます。過去を持つと今度は未来が開かれます。

生きることの意味

「先はどうなるんだろうか」不安です。希望も持ちます。「きっと良くなるんじゃないかな」。でも、どっちかという人間は不安の方がひっかかるわけです。「光華女子大学を卒業して就職できるんだろうか」。今の状況が非常に悪いと不安になります。そうするとまた過去のデータを見たりします。人間は過去と未来を持つんです。過去を持つと、過去の嫌なことは苦しみになります。悩みの元になります。また、悲しみも引きずります。そして未来が不安になります。これが人間です。

テレビでたまたま見ていましたら、NHKだったと思います、野生のチンパンジーの生態を録画した番組がありました。チンパンジーのお母さんが赤ちゃんを産むんですけど、赤ちゃんはすぐ死ぬんです。お母さんはその死んだ赤ちゃんを片手で抱えて決して離さずに、ずっと抱えたまま生活をしていきます。ジャングルの中は蒸し暑いですから、どんどん腐っていつて、一週間もすると胸に抱えていた赤ちゃんは朽ち落ちていきます。そうするとそのお母さんチンパンジーはどうするか。何事もなかったかのように普通の生活をします。これがチンパンジーです。人間は自分の産んだ赤ちゃんが亡くなったらずっと苦しみます。一年、二年、「何でこんなことになったんだろう」「何が悪かったんだろう」みんな苦しみます。お葬式を出しても苦しみます。それが人間です。つまり人間は、過去と

未来を持ったために、苦惱・不安・空過（空しく過ぎる）というものを持つようにできて
いるわけです。だから逆に、安心を求めるということが生まれてきます。

みなさんは、日本で一番有名な動物園をご存じでしょうか。北海道の旭山動物園です
ね。昔は東京の上野動物園が一番集客力があつたんですけど、今はそれを抜かして十年ぐ
らい前から旭山動物園が一番です。園長は坂東元さんという獣医さんです。五、六年前に
保育関係の先生方と一緒に行きまして、当時はまだ副園長だった坂東さんに案内をお願い
して、一時間半ほどお話をさせていただきました。その時に「今日はチンパンジー館に行き
ましょうか」と言っていて、チンパンジーのお話をしていただきました。チンパンジー
は、ご存じのようにボスがいて、群社会を作って、赤ちゃんを生んで子孫を残していきま
す。たまたまその時に、生まれてまだ三ヶ月ぐらいの小さい赤ちゃんを抱えたお母さんが
いました。チンパンジーの赤ちゃんって本当に可愛いですよ。目がくりくりつとして、茶
色い毛が生えそろってないから透けて見えるんですけど、その子はオスだったのでちんち
んがちよろつとありまして、とっても可愛かったです。で、ちよろちよろ遊ぶわけです。
そうしたら坂東先生が「もうじき別のメスのチンパンジーが来て、赤ちゃんを連れていき
ますよ。そして、必ず一時間以内に赤ちゃんを連れて帰ってきます」って言われました。

生きることの意味

そうしたら本当にメスのチンパンジーが来たんです。その子は三歳なんだけど、お母さんがやってる赤ちゃんの育て方を見よう見まねで真似て、その子を預かって別の所に行って遊んでくるんです。生まれたての自分の子どもの所に別のチンパンジーが来たら、最初はお母さんは嫌がるんですけど、いっぺん預けると次からいつでも預けるそうです。その時は二十分くらいで赤ちゃんを抱えて帰ってきました。もう片一方に木の葉っぱを持ってきて、それをお母さんチンパンジーに渡して、赤ちゃんも返しました。そうしたらお母さんチンパンジーはもらった葉っぱを食べて赤ちゃんにも食べさせるんです。すごいなあと思って見てました。育て方を全部学ぶんだそうです。

「チンパンジーが人間に一番近い霊長類というのはどういうことですか」と坂東先生に聞きましたら、まず「肩が回る」チンパンジーとかオランウータンが人間に近いんだそうです。そして面白いのは、チンパンジーは赤ちゃんを生むと五年間は一切交尾をしないそうです。なぜか。チンパンジーは一人前になるまで五年かかるそうです。その間お母さんチンパンジーは次の子を産まないんです。そしてその間、群社会みんなで赤ちゃんを育てるわけです。聞いてますと面白いですね。ボスがいるわけですけど、三歳ぐらいになるまでは、赤ちゃんが少々やんちゃなことをしても怒らないそうです。ところが、三歳を過

ぎて一人前になる四、五歳になってやんちゃをすると、ボスはその子どもを、殴る、蹴る、殺すんじゃないかと思うぐらい徹底的にやるそうです。そうして群社会のルールを教えていくわけです。そして五歳になったら一人前として独立します。そうするとお母さんはまた交尾をして次の子どもを産んで、子孫を残そうとします。それはまさに、「今・ここ」を一生懸命生きる。これがチンパンジーなんです。だから人間とは違うわけです。

繰り返すようですが、人間は、過去と未来を持ったために、苦しんだり、悩んだり、悲しんだり、そして、未来に不安を抱いたりします。希望も抱きますが、自分の悩みや苦しみを解決するのは大変ですから、何とか安心する世界を持ちたいと思います。逆に、「悩んだり苦しんだりすることはもうやめよう」「しんどいことはやめて、できるだけ悩まない、苦しめない」「先のことは考えない、今が楽しければ良いではないか」という考えをもったとしたら、それは、人間を外れたチンパンジー・お猿さんの生活だということになります。そういう意味で、どうしたら安心できるのかを明かそうとしているのが宗教じゃないでしょうか。人間に生まれたからには、本当に大切なものを求めざるえない。そうでないと安心できない。そこに宗教が生まれてきた意味があるんです。人間にとって「宗教は必要だ」ということじゃないでしょうか。これはまた、それぞれがお考えいただきました

生きることの意味

いと思います。

次に、じゃあ、どういう生き方をすればいいのかという話です。光華女子高校には宗教の時間があると思いますが、そこで使われるテキスト『親鸞 生涯と教え』の冒頭に三人の先生方の紹介文があります。鈴木大拙、曾我量深、金子大栄という、真宗大谷派では非常に大事な、世界的にも有名な先生です。この三人の先生はみんな亡くなりましたけど、二つの共通点があります。一つは、三人の先生はみんな九十歳以上まで生きられた、非常に長生きであったということです。もう一つは、最後に「ありがとう」と言って亡くなられたということです。これは有名な話です。

この「ありがとう」という言葉は、人間に生まれたことを喜び、たとえ苦勞の多い人生であったとしても、尊い、得がたい人生を生きることのできた喜びを表す言葉である。(略)誰もが心の深いところで、人間に生まれたことを喜び、生きてきたことに満足できるものになりたいと願っている。(略)では、どのようにすればそのような生きることができるのであるのか。

「ありがとう」とお礼を言って死ぬる人生はどうしたらできるんだろうか。もうちょっとテキストに添って読みますと、

〈いのち〉終わる最後に、「こんなことなら生まれてこなかったほうがよかった」という思いしかのこらないとすれば、自分の生きてきた歩みのすべてが空しいということになってしまう。そういう意味では、私たち誰もが、心の深いところで、人間に生まれてきたことを喜び、生きてきたことに満足できるものになりたいと願っているのである。では、どのようにすればそのように生きることができるのであるだろうか。

どのようにしたら「ありがとう」と言えるか。「こんな人生つまらんかった」「何でこんなことになったんやろう」と言って死ぬのはあまりにも空しい。苦勞もあつた、悲しいことかもしれないあつた、しかし、私にとって自分の人生は得難いものだったと言える。自分に生まれたことを喜びとする。もっと言うと、この顔で、この根性で、生まれて生きてきた。そのことがありがたい。そういう人生になったら本当に嬉しいのではないか、という話であります。

生きることの意味

どのようにしたらそうなれるのかということなんですが、その前に、私たちは今どういう生き方をしているんだろうかということを考えてみたいと思います。現代人の幸福感、何を大事に生きているかということです。これはちょっと古いデータで申し訳ないんですけども、ある新聞社が「あなたにとって一番大切なものは何ですか」という質問をしました。ベスト3、一番が健康、二番が家族、三番がお金です。みなさんもだいたいそう思いませんか。まず、元気で生きたい。そして、家族みんな円満に仲良く生きたい。そして、できれば、楽しく、ゆつくり、楽に生きていくためにお金も欲しい。ところが、自ら命を絶つ。ご存じのように日本は自殺が世界で一番です。年間三万人を超えて十年間続きました。日本は世界でも有数の経済大国、豊かな国であるのに、世界で一番自ら命を絶つ人が多い。自殺は年間三万人ですけど、自殺未遂を入れると十五〜二十万人と言われています。何でそうなるんだろうか。自殺の原因を調べてみると、一番が病氣、二番が経済問題、三番が人間関係（これはちょっと大きくくくったものですけど、家庭、職場の人間関係のズレ）に悩んで自ら命を絶つ人が多いわけです。もう一つ、日本中にいろんな神社がありますけど、もう一つ、もらうお札が一番多いのは無病息災です。病氣にならないで健康に生きたい。二番が家内安全、家族がみんな元気に暮らせますように。三番が商売繁盛、経済的に

豊かな暮らしができませんように。この三つを比べてみますと共通点が分かります。大切なもの、健康。自殺原因の一番は、病気。そしてお札は、無病息災。全部繋がっています。健康であれば一番良いですけれども、健康を害した時、病気をしたら、もう生きていけない、生きている価値がない、死んでしまおう、ということになります。だから無病息災というお札を買って、「頼みますから、神様何とかしてください」となってくるんじゃないでしょうか。二番目の家族もそうです。自死の二番目には経済が来ていますけれども、事業で失敗したり、借金を抱えて首が回らない、もう死んでしまおう。そして人間関係も、家族、家内安全に繋がりますから、この三つ全てが繋がっているということになります。健康で長生きして、他人に迷惑をかけないことが一番の幸せであると現代人は思っているわけです。

PPCって分かりますか。ピンピンコロリという意味です。元気でピンピンしていて死ぬ時はコロッと死ぬ。これを現代人は一番望んでいます。だから、大切なものが崩れると死に至る。生きている価値がない。そして、健康が第一ですから、健康を維持するためにサプリメント業界が非常に流行るわけです。DHCとかね、グルグルグルコサミンとかね、みんな買うじゃないですか。今、サプリメント業界は何十億という業界です。非常に

生きることの意味

儲かっています。何でもかんでも、これさえ飲んでいれば大丈夫だと思ひ込んでます。お医者さんに「あれはどうなんでしょうか」と聞きましたら、サプリメントはその人に合うか合わないか、効いたり効かなかったり、確率は五〇%ぐらいだそうです。だから、「サプリメントさえ飲んでいけば大丈夫という保障はどこにもない」とおっしゃっています。だけど、私たちは健康のためにそういうことを一生懸命やります。そういう私たちの、「健康で長生きをしておれば幸せになれるはずだ」という現代の幸福感は、全て、欲望・欲求が満たされるというところに根づいています。自分たちの欲望・欲求が叶うことが一番の幸せ。健康が欲しい、健康であれば幸せ。お金が欲しい、お金が入れば幸せ。そう思い込んでいるわけです。でもこれには大きな落とし穴があります。

四、五年前でしょうか。千葉県である中年の女性が殺されたというニュースをやっていました。六十何歳かでしたが、何で殺されたか。実はそのご婦人は宝くじが当たったんです、三億円。覚えてませんか。これで私の残りの人生は左うちわで悠悠々自適だと喜んで。そしたら、三億円当たったと聞いたみんなが回りに寄って来るわけです。ある飲み屋で知り合ったおじさんが「おれ、借金で首が回らないから貸してくれ」「何ぼや」「三十万貸してくれ」「三十万ぐらいだったら貸してあげるわ」と。次に、「もうちょっと貸してくれ、

五十万」また貸したんですよ。合計百万いくら貸したんです。でも、なかなか返してくれそうにない。そこでおばちゃんは怒って「私のお金を早く返せ」ってなつたんです。それたらケンカになって、そのおじさんが腹を立てて出刃包丁でぶすつと刺して、おばちゃんは死んだんです。お金があつたら幸せだ。宝くじに当たつたからもう大丈夫だと思つたら、自分が殺されるはめになつたということです。だから私はいつもご門徒に、「宝くじに当たつてもろくなことがないから、全部お寺に持つてきなさい。仏法のため、お寺のために使うのが一番や」と言うんですけど、誰一人として持つてきません。欲なんです。自分の欲望が全部叶えば良いと思つてますから、なかなかそうはいかない。そのように、欲望が満たされると必ず幸せになれると思ひ込んでいるのは、実は苦しみの原因にもなります。これが過去と未来を持つ人間の本性なんです。欲を満足させる生き方は問題を生みま

す。

現代の病は、孤独・不安・空過です。欲を満足させると幸せになるという生き方は、必ず、孤独で、不安で、空しく過ぎる。それを一番分かりやすく考えられるものということ、浦島太郎の歌を挙げました。浦島太郎の話はみんな知ってますよね。子どもたちにいじめられていた亀さんを浦島太郎が助けて、その亀さんがお礼に竜宮城へ連れて行くとい

生きることの意味

う話です。これを調べてみますと、実際には瀬戸内海に昔からあった言い伝えて、本当はお嫁さんをもらうというような、いろんな説があるようですが、とりあえずここでは浦島太郎の話の歌にして。五番まであります。一番目はみなさんよくご存じだと思います。

一、昔むかし浦島は

助けたカメに連れられて

竜宮城へ来てみれば

絵にもかけない美しさ

これは何を言っているかというと、良いことをしたら良い報いがあるということ。皆さんを助けるということは良いことですよね。そうしたら竜宮城という夢の世界へ連れて行ってあげるといふことです。竜宮城は何かというと、

二、乙姫様の御馳走に

鯛や平目の舞い踊り

ただ珍しく面白く

月日のたつのも夢の中うち

竜宮城は全部自分の欲を満たしてくれる、天人の世界です。つまり、自分の欲を満たした世界は本当に面白くて楽しくて仕方がないということです。これは良くできているなど思っています。乙姫様のご馳走です。おばあさんのご馳走ではダメなんです。若い綺麗な乙姫様だから良いんです。鯛や平目、イワシやサンマじゃダメなんです。それが本当に自分の欲望に叶うということです。そして、そういう生活をしていると、面白くて、楽しくて、夢のような世界で、あつという間に過ぎていくということです。ところが、

三、遊びにあきて気がついて

お暇ごいもそこそこに

帰る途中の楽しみは

土産にもらった玉手箱

生きることの意味

欲を満足させて、楽しくて仕方がない。実際にそうだと思うんですね。お金はあるわ、美味いものはあるわ、思い通りになるわ、美しい人はいるわ。でも、これをずっと続けていくと、「これは違う」と気づくのが人間だと言っているわけです。つまり、欲望が満足する世界は、決してそれだけでは済まないということです。本当のものではない、遊びだと気づく。本当にやりたいことは他にあると気づくのが人間です。しまったと、毎日、毎日こんなところで遊んでいて、夢のような生活をしていたらアカンと。夢って覚めるものなんでしょう。昔、藤圭子という人がいて、♪夢は夜ひらく、という歌があったんですけど、みなさんは知らないですね。学長先生は良く知っているとありますが、夢は夜開くんですけど、朝覚めるんです。これが夢です。従って、夢だと気づくんです。そして、ここはダメだ、帰ろうと。ところが人間はただでは帰りません。ちゃんと土産を持って帰りましようというのが、この三番です。人間は欲が深いんです。どこまでも損をしないように、得をするように。

四、帰ってみればこはいかに

元居た家も村もなく

道にゆきあう人々は

顔も知らない者ばかり

しまった、こんなはずじゃないと、もつとちゃんとしなさいといけないと帰ってみたら、どうしたことだろう。顔も知らない人ばかり。ここが“孤独”を表しています。楽しかった、面白かった、欲を満足させる生活をしていたら、実は孤独になっていたと気づくんです。非常に大事なところです。孤独になるともちろん不安になります。周りの人はどうしたんだろう。オレは今からどうしたらいいんやろうと。

五、心細さに蓋取れば

開けて悔しき玉手箱

中からぱつと白煙

たちまち太郎はお爺さん

この白煙は何だろうといつも課題になりますけど、これはまたみなさんで考えてみてくだ

生きることの意味

さい。白煙は何を意味しているのか。いろんなことが考えられます。欲を満足させる生活、元気で長生きして思い通りに行く生活、これは確かに、楽しくて、面白くて、仕方がない。でもそれは、本当に私が願っているものとは違うということです。そういうことをやっている、必ず孤独になっていきます。孤独になると不安になります。そして「私の人生は何だったんだ」と、空しさを覚えます。空過です。これが現代人の三つの病と言われているものです。落とし穴です。でも、私たちは欲を満足させる生活をしようとして頑張るわけです。

欲を満足させる、その「欲」とは何かと言いますと、仏教では、食欲、睡眠欲、性欲、財欲、名誉欲を基本的な五欲と言っています。食べること、寝ること、子孫を残すこと（異性を求めること）、お金をたくさん持とうとすること、有名になろうとすること（嫌われたくないということ）です。人間って、嫌われたと思う人は一人もいないと思うんです。出来れば仲良く、「あの人は良い人だ」と言われたい。この五欲を常に求めるわけです。そういう生き方になっています。だけど実は、その生き方が、孤独や、不安や、空過を生むんです。そういうふうと考えていきますと、私たちは人間に生まれて、どういうことを考えないといけないのか。つまり、生きることの意味です。生きることの意味は、そ

のまま、生まれてきたことの意味を問うということです。そこで、親鸞聖人の生き方が浦島太郎とはどこが違うかを少し考えてみたいと思います。

まず、「人と生まれて」ということが大事です。「人に生まれて人になる」は京都・大谷高校のスローガンで、「to be human」と表していますが、何のために生まれてきたのかを考えましょうということです。親鸞聖人の伝記につきましては、みなさんお持ちの聖典一七三頁から始まっています。開いていただきますと、『親鸞聖人伝』があります。

宗祖親鸞聖人はその九十年の生涯を通して、人生の眞実を求め、浄土眞宗の教えを説き明かされた方です。その生涯は誠に波乱に富んだものでありましたが、自らのことについては全く語られることがなかったので、確実に判明していることはあまり多くはありません。しかしその足跡は、京都から北陸、関東にまで及んでいます。

親鸞聖人はあまり自分のことは書いておられないので、明治時代には親鸞聖人不在説も出たくらいです。本当はおられなかったんじゃないのかと。最近では聖徳太子不在説がありますね。その話はちよつと置きますが、親鸞聖人は九十年の生涯を生きた方であるとい

うことです。

『求道』

親鸞聖人は平安時代の末期、貞観三年（一一七三年）に京都の郊外・日野の近くで誕生されました。聖人の父は、日野有範といい、藤原氏の血の流れを汲む下級貴族であつて、皇太后大進という役職にあつた方でした。

まず、親鸞聖人は一般の家に生まれたということです。貴族の家です。

「人と生まれる」ということがすごいことなんです。チンパンジーではないわけです。生まれた意味を尋ねないといけないのが人間です。そこで手掛かりとして、杉山平一という方が書かれた詩を載せておきました。杉山さんは一九二四―二〇一二年まで生きられた、つまり九十八歳ですね。非常に長生きをされた方で、詩人であり、映画評論家であり、帝塚山学院大学名誉教授でもあります。この『生』という詩は、年齢で言うくと九十歳くらいの時に書かれていると思われれます。

生きることの意味

『生』

ものを取りに部屋に入って

何を取りに来たかを忘れて

もどることがある

みなさん方は若いからまだないかもしれませんが、四十、五十歳くらいになるとだんだん
こういう現象が起きてきます。

もどる途中で

ハタと思いだすことがあるが

その時はすばらしい

「ああ、そうやった、そうやった。財布取りに来たんやった」「眼鏡を取りに来たんや」と、思い出すのは素晴らしいということです。問題はその次です。

生きることの意味

身体が先にこの世に出てきてしまったのである

その用事は何であったか

いつの日か思い出すときのある人は

幸せである

思い出せぬまま

僕はすごすごあの世にもどる

「身体が先にこの世に出てきてしまった」とは何か。「今からお母さんのお腹の中から生まれてやるぞ」「世の中に出たらこれをやってやろう」そういうふうを考えて生まれてくる人は一人もいません。物心がついて、「私は、こういう私だったんだ」と気づくわけです。ある先生が「人間というの是一年早く生まれた未熟児である」と言われたことがあります。つまり、人間は「おぎゃー」と生まれてから一人では生きていきません。必ず誰かのお世話にならないと生きていきません。馬なんかそうですけど、生まれてから十五分以内

に自分の足でちゃんと立ち上がって、自分からお母さんのお乳を飲みに行きます。動物はそうですが、人間はそうではありません。生まれたら、抱っこしてもらって、へその緒を

切ってもらって、お乳を飲ませてもらわないと生きていけません。そういう人間が、なぜ身体から先に生まれてきたのか。その用事は何であったのか。何をしにこの世に生まれてきたのか。そのことをいつの日か思い出すことのある人は幸せである、ということですよ。「このために私は生まれて来たんだ」これが分かった人は幸せである。そして、杉山平一さんは九十歳になって人生を振り返えられた。詩人であり、映画評論家であり、大学の先生でありますから、その九十年の生涯をしっかりと生きてきた人でありましょう。しかし、考えてみたら「何だったんだろうか」ということになった。そして、「思い出せぬまま 僕はすすごすごあの世にもどる」。来たところへともういっぺん帰って行くんだという感覚ですね。「すすごすご」とありますから、「こんなはずではなかった」「どうしてこうなったんだろう」「本当に大事なものは何であろうか。それを明らかにしたい」そういう意味ではないでしょうか。私たちは何のために生まれてきたのか。それを求める。それが人間なんだということになるかと思えます。

次に、真面目な求道（道を求める。道は真実という意味）です。人間に生まれて、私にとって一番大切なものは何であるかを求めて行くこうということですよ。親鸞聖人はそういう意味では真面目な方です。九歳で比叡山に登られたということになっておりますが、一生

生きることの意味

懸命勉強をされました。並大抵の勉強ではなかったと、最近の学者の方はおっしゃいます。これはある意味、浦島太郎と一緒にですね。善人です。勉強して「あなたは素晴らしい人だ」と言われたいんです。自分も本当にそのことを知りたい。真面目にやっつけば必ず分かる時が来るはずだと。ところが、その真面目な生き方は、必ず、自己矛盾や、行き詰まることがあります。真面目に生きれば生きるほど行き詰まる。悩み苦しむだろうということですよ。

人間は、正しいことをしたら真面目だと思っています。間違いということが分かれば変えますけど、正しいと思いついていたら自分を振り返るきっかけにはなかなかありません。それに気づくということもあるわけですけど、気づかされるといふこともあります。

和とは不和なり 不和の悲しみなり すなわち感応道交す (曾我量深)

冒頭で紹介した長生きをされた有名な三人の先生の一人、曾我量深の言葉を出しておきました。「和」は仲良くしましょう。みんなと仲良くすることが悪いことだと言う人は一人もいません。韓国と日本は仲良くしましょう。できれば中国とも仲良くしましょう。友

達ともそうです。みんな仲良くしたいと思って和を大事にしましょうということになります。仲良くすることは悪いことではないとみんな思い込んでいます。ところが、仲良くすればするほど必ず「不和」を生むということです。つまり、この人と仲良くしたらそこから外れる人が必ず出てくるということです。和とは不和なり。じゃあどうするのか。「感応道交す（大きな世界が必要である）」とおっしゃいます。今日はそこはあまり申し上げませんが、仲良くしたいと思えば思うほど仲良くできない人が生まれてくる。それは悲しいことだ。全員が本当に仲良くなるということはあり得ないんです。

親鸞聖人も九歳で比叡山に上がられまして、一生懸命勉強して修行をされます。比叡山に行かれると分かりますけど、常行三昧堂がありまして、ずっと念仏を「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」と唱える修行があります。今でも行われていますが、そういう修行もして、そして經典も一生懸命勉強したわけです。真面目にやられるわけですけど、真面目にやればやるほど、「学んだことは何だったんだらう」という自己矛盾にぶつかっていくということがあります。

例えば、聖典の一七五頁を開いていただきますと、

生きることの意味

出家された聖人はやがて当時の仏教研究の中心であり、仏教修行の道場でもあった比叡山延暦寺に登り、修行の道を歩みはじめられました。その後、二十年の間、聖人はひたすら道を求めて学問修行をされました。この期間に堂僧を務めたことが知られますが、その堂僧は常行三昧堂の不断念仏僧のことです。しかし、そのような修行の中で、人生の真実を求めれば求めるほど、また、仏教の勉強をすればするほど自分の無力を知らされる。煩惱を捨てきれない人間を痛感させられるばかりである。若い聖人は悩み続けられました。

つまり、真面目にやればやるほど、何でこうなんだろうと煮詰まっていってしまうことです。私たちはそこを途中でやめてしまうことが多いですね。「こんなことならやめよう」「もつと他のことしよう」となります。しかし親鸞聖人は続けられたということです。浦島太郎は同じように真面目にやっただけですけど、竜宮城へ連れて行かれて、欲を満足させる世界にどっぷりとつかった。親鸞聖人は比叡山に上がって真面目に勉強をされますけれども、悩み苦しみにぶつかっていかれました。ここに大きな差があります。ところがその後、親鸞聖人は先生と出会われます。聖徳太子や法然上人との出会いであります。時間

がありませんので簡単に申し上げていきますけれども、一七六頁です。

参堂して九十五日目の明け方、うとうとしていた聖人に六角堂の本尊である救世観音の夢のお告げが聞こえてきました。それは、「聖徳太子の文を結びて示現に預からせ給ひて」とあるように、聖徳太子の言葉によるお告げであつたと伝えられています。

当時、聖徳太子の太子信仰は非常に強かつたようです。親鸞聖人も聖徳太子を尊敬されて、救いを求められます。それが夢の示現ということになりました。その後、法然上人にも出会っていきます。つまり、聖徳太子や法然上人に出会つたということは、「そうだ、これをやつていこう」と自分の歩みの決断になつたということです。

私たちは人生の中で、先生に出会うということが大事であります。自分一人で目覚めるということとは決してできません。起こしてくれる人、目覚めさせてくれる人が必ずいるわけです。今、寝ている人がいっぱいいますけど、私が学生時代からずっとお世話になつていた先生は、いつも言っていました。宗教に関するようなこういふ話は、真面目に聞く人もいるんですけど、結構寝るんですね、みんな。眠たくなると人間は「起きないかん」と

生きることの意味

思いますよね。そして何をするかというところ、自分の手を叩いたりつねったりします。それで自分を起こそうとするわけです。ところが、自分で叩いたりつねったりしても起きれないんです。何故か。この、叩いたりつねったりする、こっちの手も眠たい自分の手だからです。眠たい自分の手で眠たい自分を起こすことは不可能なんです。じゃあ、その時はどうすればいいか。隣の人に「私がつうとと寝始めたら、遠慮はいらんからバシッと叩いて起こしてください」と頼んでおけばいいわけです。バシッと叩かれたらビックリして目が覚めますよね。「何すんねん」と言うかもしれないけど、起きている人が私を起こしてくれるわけです。一緒に寝とつたらダメですよ。隣の人もガーッと寝とつたら起きることとはありません。目覚めた人が必ず目を覚まさせてくれる。それを先生と言います。これを善き人と言います。眠りたい私を目覚めさせてくれる人です。だから、そういう人に出会わないと人間は目が覚めないんです。

私も自分の経験がありまして、今から三十年ほど前になりますけれども、学生時代に私の祖父がいきなり心臓発作で亡くなったんです。とても元気だったんですけどね。寒い日にせき込んで心臓発作で亡くなりました。私は当時は学生で京都にいたんですけど、すぐ帰ってこいということとで飛んで帰りました。横たわっているじいさん。私は身内の死

が初めてでした。「ああ、眠ってるように死んでるんだ」。触ってみました。ひんやりしました。これは生きてない。物質だと思いました。死体ですね。ひんやりするんですよ。「ああ、死んだんだ」とその時に思いました。群馬県に日本一のスネークセンターがあるんですけど、ごそんじでしょうか。私は学生時代にそこへ遊びに行きました。このくらいの太さの五メートルぐらいあるニシキヘビを抱いて写真を撮ったりできるんですけど、こんな頭のニシキヘビがぺろと舌を出すんですよ。ちょうど夏休みに行きましたから、Tシャツを着ていて首が出てるんですけど、そこへニシキヘビを抱えた時の、重さと冷たいひんやりした感覚は死体と一緒にでした。

私は、初めて学生時代に「人が死ぬというのはこういうことだ」ということを経験しました。私の家はお寺ですから、亡くなった時から精進という生活が始まります。魚とか肉とか一切食べない。おみそ汁と、野菜を炊いた煮付けと、白いご飯と、漬け物です。それを朝昼晩食べるんです。密葬が終わって一週間後に門徒葬といって門徒さんが来てくださって、じいさんの葬式をしてくれるんですけど、それが終わって、やっとこれで朝から肉が食べられるなと思ったら、うちの親父が「おれは今から四十九日まで精進する」と言い出しました。また、肉とか魚を食べないというわけです。「親が死んだんだから、おれは

生きることの意味

今から精進する」。親父がやるなら孫の私もしないといけないかなと、私も精進しようと思いました。学生ですから京都で精進の生活が始まりました。精進って本当に食べるものがないですよ。うどん一杯でも、いりこだしはダメ、昆布だしです。私はこう見えても真面目ですから、本当に精進をしました。そうしたら、一月ですから、みんなで新年会をしようということになりました。大学院の時ですからゼミがありました、「今日の新年会は祇園に行きましょう」ということで、先生が連れて行ってくれました。綺麗な女将さんのいる小料理屋に入りまして、七、八人がカウンターに座って、たまたま先生の隣に私が座っていたんですけれども、先生が「ママさん、今日は何がありますか」と言うと女将さんが「今日は生きた車海老があります」と言うんです。「そうですか。いいですね。じゃあ、みんなにそれを出してください」。そして隣の私には「こちらの人には漬け物を出してください」と、私は精進してますから。みんなは生きた車海老、私は漬け物なんです。隣にいた先生が「武井くん、あなたは精進をしておるらしいですね」「はい。じいさんが死んで、親父も四十九日まで精進をされると言いますから、私も頑張って精進をしております」「偉いですね。すごいですね。よくやりますね」と褒めてもらいました。私は「はあ…」と言ってたんですけど、その次に、「武井くん、そういうのが本当の精進でしょうか」と

言われました。私はビックリしました。自分は良いことをしていると誤ってますから。真面目に一生懸命やっていることを否定されたんです。しかも尊敬する先生からですよ。それから何を先生は言っているんだろうと考えました。そうしたら気づくことがあります。精進をするとやっているけれども、その一方で酒を飲んで騒いでいたら精進にはならないということです。本当に供養するというのはどういうことなのか。こういうテーマだと思います。それが本当の精進か、その真面目さは本当かと、目を覚まされるわけです。人間は欲望を満足させる生き方を追求しているんですけども、そういう人に出会って、初めてそうではないと気がつくわけです。自分ではなかなか気づきません。いろんなものに出会って、いろんな人に出会って、そして初めて目が覚めるんです。それが先生と出会うということでありましょう。

親鸞聖人はそういう出会いを通して、社会から「お前たちは間違っている」と言われます。しかしながら親鸞聖人は、私の出会った法然上人から学んだ教えは間違いないと、本当に自信を持っておられますから、逆に非難されたことを縁として真実を証明する使命感に転換させていきます。法難は罪人になるわけですから自分にとって良いことはありません。しかし、罪人になることによって改めて大事なことが分かった。このことを証明しよ

生きることの意味

うと立ち上がっていくわけです。

これは私がお世話になった先生から教わったんですが、「生命を継ぐものは生命を捧げていく」。つまり、本当に大事なものを継いでいこうと思うと、命がけでやっていかなくてはいけない。親鸞聖人は、自分が厳しい状況に追い込まれれば追い込まれるほど、本当にこの教えは正しいという使命感で立ち上がって行かれます。それが親鸞聖人です。

そういう中から、改めて親鸞聖人は「愚の自覚」私は悪人であった、愚かな者であった、ということに気づいて行かれます。もつとと言うと、私は迷い迷う存在であったということに気づいていかれます。それがとっても大事なところですね。これは法然上人がおっしゃった言葉ですが、親鸞聖人は八十歳になって法然上人の何十年も前の言葉を思いだすことがあるわけです。「浄土宗の人は愚者になりて往生す」。善人になって往生するんじゃないということです。愚かな者という自覚によって初めて往生する、つまり救われていくということです。善人では救われないということをはっきりとおっしゃっています。それが親鸞聖人の生き方です。

そして、最後に親鸞聖人は、ご恩に生きるということに目覚めていかれます。私は一人では何もできない。一人で生きていく人間ではない。人間は一人で生きていけない、愚か

なものだと。自分が頑張っているから生きていけると思っているけれど、そうじゃなかったんだと。みんなに助けられて、みんなにお世話になって、やっと生きてきた。ありがたいことであると、ご恩を受け止めていかれます。

仏教には、父母の恩、国王の恩、衆生の恩、三宝の恩、の四つの恩があります。父母はお父さんお母さんです。これは分かります。私がおここに生まれているのはお父さんとお母さんのお陰ですからね。でないと人間として生まれてこない。両親に対する恩がある。国王は先生のことです。中国における国王は、みんなを導いて救われるようにする国王でありますから、先生という意味です。衆生は生きとし生けるものですから、言ってみれば社会です。いろんな命を頂いて、命を奪って生きている。これが人間であるということですから。そして三宝の恩。三つの宝“仏法僧”ですから、いわゆる仏法に対する恩というものです。私はみなさんと同じ学生時代にこれを聞いた時に「ああ、そうか」と。父母のご恩が分かって、先生のご恩が分かって、社会とかいろんなご恩があると分かって、そうしたらやっと仏法のご恩が分かるのかなと思っていました。大きな誤りだったことに気づきました。そうではないんです。親鸞聖人はそうはおっしゃっていない。仏法のご恩が解ることが大事だとおっしゃいます。仏法のご恩が解ったら、本当に、両親のご恩、先生のご

生きることの意味

恩、命に対するご恩がみんな解るとおっしゃいます。しかも深く頂けるとおっしゃいます。仏法のご恩が解らないと、都合の良いところだけご恩と感じるんですね。都合の悪いところは排除するんです。例えば、「何でこんな顔に生まれたんや」「お母ちゃんが不細工やったからや」と、母親のせいにするわけです。これは我々です。都合の良い時だけご恩といって、都合の悪いことは相手のせいにする。そうではないということです。都合の良いことも悪いことも、みんなご恩であったということが解る。仏法のご恩が解れば本当に深く解ってきます。親鸞聖人はそうおっしゃっています。

「顔の作りは親の責任、表情の作りは自分の責任」こう言われたお坊さんがいます。私がかような顔に生まれたのは、遺伝子がありますからどうしても親の影響をたくさん受けています。この顔の作りになったのは親の責任。これは間違いないだろう。隣のお父ちゃんに似てたら問題になりますからね。ところが、表情は自分の責任だと言うんです。どんなに作りの良い顔をしていても「お前何やねん」とべらんめい口調でやったり、いらんことをしていると表情にすぐ出ます。表情は自分の生き方の問題である。顔の作りはともかく、「この子は良い子やな」「この子は素晴らしい表情をしてるな」「良い顔をしてるね」は全て自分の責任です。そういういろいろなご恩を考えていただきたいと思います。親鸞

聖人は仏法のご恩が解れば、いよいよ全てのご恩を深く、広く受け取ることが出来る。本当にありがたいとおっしゃっています。

そういうご恩が解る生き方の一つです。猿渡瞳さんという方がおみえになりました、ご存じだと思いますけれども、平成十六（二〇〇四）年に、中学二年生十三歳の時に癌で亡くなりました。翌、平成十七（二〇〇五）年には24時間テレビで放映もされています。この人は小学校六年生の時に骨肉腫の癌になって、一年半くらい闘病生活をして、中学校の時に退院して、中学校の弁論大会で『命を見つめて』という弁論をされています。それが非常に評価されて賞をいっぱいもらうんですけれども、賞をもらったのは亡くなった後です。七月に弁論大会をやって、二ヶ月後の九月に亡くなっています。猿渡さんは癌という病気になるって一生懸命戦った。「病気になることによって生きていく上で一番大切なことを知ることができました」と弁論大会で語っています。最後の所だけ読みます。

みなさん、私たち人間はいつどうなるかなんて誰にも分からないんです。だからこそ、一日一日がとても大切なんです。病気にかかったおかげで生きていくうえで一番大切なことを知りました。今では心から病気に感謝しています。私は自分の使命を果

生きることの意味

たすため、亡くなったみんなの分まで精一杯生きていきます。みなさんも、今生きて
いることに感謝して、くいのない人生を送ってください。

これが弁論大会の締め言葉です。一年半の闘病生活の中で十五人の友達がみんな亡くな
っていきます。一生懸命生きたいって病氣と闘うんだけど亡くなっていくんです。そうい
う友達と別れて、本当に生きていくうえで大切なことが分かったと言っているわけです。
調べていただければ弁論大会の全文が載っていますので、機会があれば見ていただければ
ありがたいと思います。

いろいろ申し上げましたが、猿渡さんは、病氣になったお陰で生きていくことの意味が
分かった、生まれた来たことの意味が分かった、と喜んでおられます。私たちは欲望いっ
ぱいに生きていますけれども、そこでもう一つ気づかなくちゃいけないことがあります。
そこからはじめて、大事な宗教、人間として生まれて何が大事か。これを尋ねていかな
くてはいけないということです。ぜひみなさんも、私は何のために生まれてきたのか、何を
するために生まれてきたのか、私は何をしたいんだろう、ということを考えていただけ

ばありがたいと思います。

長くなりましたけど、『生きることの意味——親鸞聖人の生き方——』というところで私の思っていることをお話させていただきました。何かの参考にしていただきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

——二〇一五年六月二六日——